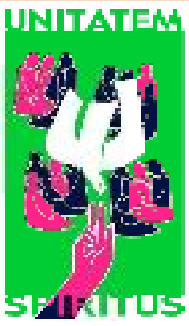
主な記事
2面　司教館の窓から
　　惜別の季
3面　特集 列福式に立ち会って
4面　若い力
5面　LOOK OUT、ひと
6面　医療のともしび、書籍DVD紹介
　　教区・司教スケジュール

カトリック高松教区報

2009年3月1日(第128号)
発行所　カトリック高松司教区 広報委員会
〒760-0074 高松市桜町1-8-9
TEL 087-831-6659　FAX 087-833-1484
Email
教区：catholic-takamatsu@takamatsu.catholic.ne.jp
広報：tk-koho@mxi.netwave.or.jp
生涯養成：yosei@takamatsu.catholic.ne.jp
WEB http://www.takamatsu.catholic.ne.jp/



一致への道

聖霊のもたらす一致

ハビエル・レチョンO・P

高松教区の掲げる目標は一致を図っていくことです。溝部脩司教様のモットー「UNITATEM SPIRITUS」（聖霊のもたらす一致）です。すべての人の一致は教会全体の司牧と宣教の源と基礎でなければなりません。

COMMUNION（一致）は宣教の基礎であって、そして宣教はCOMMUNIONの基礎です。これこそ聖霊の導きに支えられながら、私たちの高松教区が歩むべき道です。

今、修道会と聖職団、一般の信者たちは、全ての人の救いのために、イエズス・キリストの過ぎ越しの神秘と一致して自らの命を捧げ、教会趣旨に基づいて働き続ける必要があります。司牧の体験とそれに必要な研鑽は、司牧の推進力の源泉です。

今年は聖パウロ年と定められています。私たちは聖パウロの歩んだ道を振り返り、彼に倣って回心しましょう。そして、現代に表れている原理主義に陥らないために、聖霊の力と導きを強く求めていきましょう。

一致に向けての動きの中で正義と平和のために、働くことは大切なことです。善のGLOBALIZATION（世界標準）の宣教をすることは一致への大切な要素です。教育施設、病院、高齢者の介護施設などで、平和と命と愛のカテキシスをし、命の大切さを伝えること、また、家庭の中で互いの喜びと悲しみを分かち合うことが必要です。皆一致して祈り、食事をしながら、音楽を聴いたりすることによって、その中に光を見出すことができるでしょう。

私たちの教会の中は、喜びの泉のはずです。教会の典礼は恵み溢れる賛歌でなければなりません。典礼はART CEREBRANDIS（芸術の祝い）でなければならないと言われています。典礼書で決められたことに忠実に従い、実践することによって、私たちがもっと簡素で信心深いコミニケーションを保ち、一致への道が続いて行くはずです。

イエス様はすべての人に呼びかける人の心にこそ住みたいのです。イエス様は、私たちの心の中に入ると全ての物を新たにしてくださいます。イエス様は私たちを迎えに来てくださいます。救いを望むならMARANATA（主イエスよ来てください）と心を込めて祈りましょう。

聖霊の力と聖パウロのカリスマに支えられて、復活祭には私たちが主の復活の証人となり、人々に光をもたらすことができるように、四旬節の間よい準備を整えましょう。

最後に、高松教区のために、労苦を惜しまず、絶え間なく働かれている溝部脩司教様に感謝の祈りを捧げます。

一致という共通認識

協力宣教司牧をすすめよう

徳島地区宣教司牧評議会の会長を任じられることになりました。ある程度の自己覚知ができているつもりですが、私はこのような任にふさわしい人間ではありません。流れに抗うことができずに引き受けることになりましたが、何かしら私が為すべきことが待っているのかもしれません。今はまだ何もわからず、任の重さばかりを感じてうろたえています。

私が何故この任へと導かれたのか、日々の私自身と関連づけて（こじつけて？）考えてみます。

私が生業としているケアマネジメントは、要介護者とその家族の安心・安全、またはその方たちの幸福感・満足感を目的としたチームケアです。高松教区は今「一致」というテーマで、すべての教区民が一つの喜びを共有することを目的に「協力宣教司牧」というチームケアを行っているのかもしれません。

チームケアにはチームワークとして①目標や課題について共同の認識をもつ。②それぞれの役割を明確にし、責任をもって業務を遂行する。③それぞれが得た情報を共有できる方法をもち、情報交換ができる。④それぞれの専門性を尊重し、チームが円滑に活動できるように配慮しつつ相互に刺激しあい、専門性の向上への努力ができる。等々が必要ですが、これらを高松教区に置き換えてみると①「福音宣教」という目標は持っていて、共同体としての活動が②～④に該当するかと思います。そしてチームワークの根拠となるのが、課題についての共同の認識を持つことであり「一致」なのだろうと思います。

鳴門教会　橋本正士

叙階の喜びを共に

皆様方は私のための天使です

ペトロ・ユ・チョンピル神父
聖ドミニコ修道会
イグナシウス・アンティオキ・ザヒヤ・ロファンディ神父
聖ドミニコ修道会

小さな　のぞみ

私は、二〇〇八年二月、日本の松山へ来て、同年五月に高松教区司教フランシスコ・ザビエル溝部脩司教様から助祭叙階を受け、十二月十四日韓国のソウルで司祭叙階を受けたドミニコ会の韓国人のユ・チョンピル・ペトロ（三十五歳）です。まだ日本語が下手ですから、どうか宜しくお願いします。

まだまだ、日本語と日本について、現在、勉強中ですけど、司祭になって初めて日本で司祭職を遂行するので、小さなのぞみが無いことはないと思っています。

修道生活も大切

私はまず修道者です。修道者とは自分の存在で神様をあらわさなければならないと思います。だから私もまず祈りをしながら聖徳を追求するなかで、宣教活動にまい進しなければならないと思います。

司教様に忠実に

地域教会のために奉仕。司祭に叙階された以上、教会の制度の中で活動しなければならないと思います。事実、司祭とは司教様の手となり、足となる道具だと思います。司教様を中心に信者と共に、一つの聖い教会である地域教会に奉仕することが、全教会にも奉仕することになるのだと思います。

信者数の増加と聖招の発掘

現在、宣教の意味とは何かを考えなければならないと思いますが、イエス様の最後の言葉を考えると、人々が洗礼を受けること、つまり信者たちが増えることは大切な勤めであることが分かります。また、聖招の発掘は日本教会の将来の運命にかかわる問題だとしても言い過ぎでないことです。

それゆえに、私にはこのような宣教活動にまい進しようとする望みがあります。

司教様と神父たちと皆様、私は皆様の前で、神様と皆様に感謝を申しあげ、キリストのしもべとして、わが身を日本の宣教活動に捧げます。

私が数年前に神父への道を志した時、神様は、この道は決して簡単な道ではない、しかし、信じて行動すれば、必ず道は開けると約束してくれました。私はこの瞬間に神様が言った言葉を理解できたのです。

私は神様との約束を守って、神父になりましたが、もちろんこの道は終わりではありません。むしろ、本当に神様に召される瞬間までの始まりでもあるのです。もし、神様が私のために、天使たちを送ってくれなければ、今日、私が神父になれても、神様に召される瞬間まで到達することはできないのです。

天使は今ここにいます。皆様方は、私のための天使です。疑いや恐れが私の近くに来る時、ある天使は私のために祈り、ある天使は、「ロファンデイ、大丈夫、頑張れ」と言って、私に勇気を与え、ある天使は私に平和や喜びをもたらし、またある天使は私に微笑んでくれるでしょう。

私は皆様方に心をこめて、感謝の意を伝えたい。神様は私と皆様のために祈ることを知っています。神様の愛を賛美し、皆様方に祝福がありますように。

ありがとう、ありがとう、ありがとう。

はばたき

先日、大学入試センター試験の監督業務を行った。事前に、ＩＣプレーヤーを使う英語リスニングテストとその他の試験についての実施方法やトラブル対策につき、計四時間ほどの講習があった。当日は、秒単位で時計を合わせた時間管理が求められる。新聞報道では、試験時間が一分短かった国語の試験、二十五秒足りなかったリスニングテストで、再試験が行われることになったそうだ。私を含め、世事に疎くマイペースで行動することの多い大学教員の多くにとっては、ストレスフルな業務である。

いつもは気が進まない業務なのだが、今年は心を少し入れ換え「受験生に信頼感とリラックスを与えられる監督者」をめざしてみようと思った。そこで特に二つのことに留意した。一つは、様々に想定されるトラブルのケースを踏まえつつ、予防や対応について基本原則をしっかり頭に叩き込んでおくことである。そうすれば、「少々のことは何でも来い」と気持ちに余裕が生まれる。もう一つは、受験生への様々な教示を行う際、マニュアルの棒読みではなく、アイコンタクトやスマイルに心がけることである。一生にこの日にしか会うことのない受験生がほとんどではあるが、「一期一会」の精神で行こうと思った。

何とか無事に一日の試験が終了した後、一人の受験生が帰り際に「お疲れ様でした」と声をかけてくれた。これまでにない体験だった。自らも疲れているだろうに、見も知らぬ監督者にねぎらいの言葉をかけるという若人の態度に、温かさと清々しさを感じた。「与えるつもりが与えられ」という一日だった。神に感謝！

パウロ年に寄せて

ガラチア人への手紙から学ぶ

この手紙を見ると、表現がとてもナイーブなのに親しみを感じます。パウロの改心が復活されたキリスト自身からの突然の業による対面であったことから、彼のうちに起こった変革、神の業と信仰との展望の変化は、全人格がキリストの働きに貫かれたものとなった様子がその活動の中にはっきりと味わえます。

ガラチアにいるユダヤ人のキリスト信者が、ガラチアでの自分たちの共同体の存在と力を誇示するためか、律法の遵守を前面に出し、自分の派閥の生き方を、ユダヤ人でありながら異邦人に宣教する聖パウロにも押し付けようとしたようです。これは、エルザレムでの議論と決定の逆行を押し付けようとしたことになります。しかし、復活したイエスに出会ったパウロにとって、この同朋からの揺さぶりも、逆に彼らの理解を深める機会としたようです。（２章参照）「割礼を受けた人々に対する使徒としての任務のためにペトロに働きかけた方は、異邦人に対する使徒としての任務のために私にも働きかけられたのです」と言っています。

彼はこの双方に共通する救いの道を説いてゆきます。'信仰による義'です。彼は予告されていた動きを見ていたのでしょう。それは、「神が異邦人を信仰によって義となさり、祝福される」福音の伝播です。こうしてガラチア人も、唯一の主の下に、アブラハムの子としてひとつに生かされていく主の恵みを、パウロは喜んだに違いありません。

彼の柔和な真実な司牧に学びます。

「霊に導かれて生きているあなたがた、あなた自身も誘惑されないように気をつけなさい。互いに重荷を担い合いなさい。そのようにしてこそ、キリストの律法を全うすることになるのです。」（６章）

鳴門教会担当　乾　盛夫

高松教区の兄弟姉妹たち ②

スペイン外国宣教会

二回目となるこのシリーズ、今回はスペイン外国宣教会を紹介します。

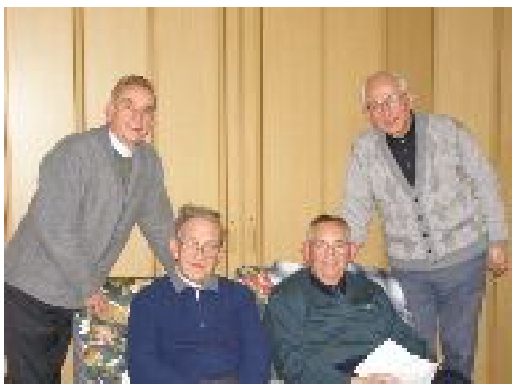
スペイン外国宣教会日本本部がある丸亀教会司祭館を訪ね、同宣教会について聞きました。

―スペイン外国宣教会の発祥について―

本会は一九一九年、スペインに於いてヘラルド・ビヨタ神父を中心に教区司祭有志が中南米等の宣教地宣教を志して集まり生れた宣教会で、現在では中南米、アフリカ、タイ、日本など十四カ国で約一七〇人の宣教師が働いている。なお、スペイン総本部現総長はイスマエル神父で、昨年まで私達と共に坂出教会で働いていました。

―日本での宣教はいつから―

日本には一九五三年一月、田口芳五郎、大阪教区長による四国西香川司牧の要請を受けて坂出を皮切りに宣教活動を開始。ひと頃は十数名で働く時期もあったが現在は大阪・高松の二教区で七人の神父が働いている。



―四国での状況―

丸亀教会（日本本部）
フェルナンド・マヨラル神父
観音寺教会
クレメンシオ・マンソ神父
伊予三島教会
ホセマリア・ビデガイン神父
司教総代理
デシデリオ・カンバラ神父

の四神父が高松教区司祭として溝部司教と一つになって宣教司牧に当たっている。

文責＝谷口広海

惜別の季

これまで高松教区の宣教と司牧に力強く共に働いてこられた濱口秀昭、佐藤直樹の両神父様が３月末をもって出身母体であるサレジオ会に帰任されます。帰任されるに当たり、お二人からコメントを頂きました。

神の計らいは限りなく、生涯わたしはその中に生きる

濱口秀昭　神父

『あなたは霊を送ってすべてを造り、地上を新たにしてくださる』（詩篇１０４・30）

教区会計の任を受けて早四年の月日が経ちました。この間、会計システムの変更をはじめ種々のことにご協力およびご支援を賜りました皆様方に心から感謝申し上げます。「ありがとうございました。」

また、ともにミサについて学べたこと・ミサを捧げられたことは、大きな喜びでした。

ところで、人は、何か問題が生じた時にそれを解決しようと必死になって頭を働かせます。そして、多くの場合、その解決を見出します。また、解決できない時には諦めてしまいがちです。

わたしたちキリスト者もそれと大差ないと思います。ただし、これだけは、忘れてはならないと自分に言い聞かせて参りました。

「神の計らいは限りなく、生涯わたしはその中に生きる」と。

確かに、人間には限界があり不可能だと思えることがあります。だからこそ、神に願い、人間の知恵を遥かに超えた神の知恵によって、一つひとつのことを実らせて頂けるよう祈りたいのです。

聖霊のはたらきを願いましょう。そして、そのはたらきに温順に従って歩みましょう。高松教区のそれぞれの教会が、四国の人々にとって、さらに心地の良い安心できる祈りの場となるよう祈ります。

さよならはいわない

佐藤直樹　神父

喜びはいつまでも
輝き続けることを
思い出は今も　あのときのまま
思い出に　そして君に
だから　さよならはいわない
たとえこのまま
会えないとしても
思い出に　そして君に
きっと　さよならはいわない
決して　さよならはいわない

（小田和正「さよならはいわない」より）

僕の今の心境は、まさにこの歌詞のような面持ちです。高松教区で僅かばかりの司牧をさせていただき、たくさんの方々と出会えたこと。出会えた方々と一緒に、教会の将来を担う若者達の活動を共につくっていけたこと。その出会いと活動を通して、しっかりと神さまの働きを感じたこと。その全ての喜びはいつまでも、僕の中に輝き続けています。

高松教区でつくったパイプを、新任地にいる若者たちと結んでいける架け橋になれたらと思います。イエス様の名のもとに、佐藤神父をダシにして、新たなネットワークをお互いに築いていきましょうね。また叫びましょう「イエスクラップ　１・２・３！……イエス」って。

司教館の窓から

司教の独り言

年のせいか、時々ぶつぶつ独り言を言っているのに気づく。まことに恥ずかしい次第だ。一月末日の夜から中高生の集まりがあり、三十数名が集まった。私は若さのむんむんするようなこの種の集まりが好きでたまらない。五十数年も中高生と付き合ってきたのが私の人生だからである。

ただ彼らと向き合っている私の感情は随分変わった。昔は真剣に向き合う情熱だった。今は孫を見るような感情であり、厳しい躾を要求する態度がなくなった。人間の生涯は生きているだけで、自分のあり方を変えていってくれるようだ。むきになることがなくなっただけに、一人でのぶつぶつが始まった。このぶつぶつが神に向かっての自然の祈りとなっているのかもしれないと思うようになった。

多分神への甘えなのかもしれない。「冬が去り、春が訪れる」、普通のこのことがひどく心に沁みる昨今である。

溝部　脩

『典礼奉仕』のために

高松教区典礼委員長　土屋和彦

仕える典礼 ②

Ⅰ．典礼とは？　→　②神と人々への奉仕「キリストの祭司職、預言職、王職に与る」

「ミサ」に与るという美しい言葉の通り、私たちは典礼において「キリストのみわざ」に与ります。

…新約聖書の中で「典礼」の語は神を礼拝する祭儀のほかに、福音の告知、愛の実践の意味でも用いられます。これらすべては、神と人々への奉仕です」（『カトリック教会のカテキズム』1070より）…

「キリストのみわざ」に与るのですから、自分の好き勝手にするのではありません。自分の感性・知識・技術に従って振舞うのでもありません。そうではなく、イエスさまの祈られたように礼拝し、イエスさまが告げられたように福音を告知し、イエスさまが仕えられたように愛の奉仕に生きます。これをカトリック教会は「キリストの祭司職（礼拝）、預言職（告知）、王職（愛の奉仕）に与る」と表現しています。「文章が分かりにくい。５回読んだら分かった」と言われましたので、例を挙げて考えてみましょう。

① 私が御聖堂でひざまずいて祈っている。そこに作業着を着たおじさんがやってきて、ヘルメットを手に持って入り口の所で立っている。「聖堂は祈りの家です。礼服を着ていない者は外に放り出されて歯ぎしりすることになっています。出て行って下さい。」と、私が言う時に「キリストのみわざ」に与っているかどうか。

② 私の小教区では、主日のミサに英語圏の方が集まる。司祭が「第二朗読を英語で」と言っているが、日本人がフランスに行っても絶対に日本語で朗読をさせてくれない。不公平だから英語での朗読を止めさせたい。

③ 私はオルガニストだからミサの歌の音程を正しく保つ責務がある。司祭が音を外したときは、会衆が正しく歌えるように、引っ張って行かなければならない。司祭の音程に負けないように正しい音程で弾く。

①②③はどこがおかしいのでしょうか？何が「キリストのみわざ」から離れる原因になるのでしょうか？

次回は「典礼憲章」７に基づいて、この三つのことをもう一度取り上げてみたいと思います。

Ⅰ．典礼とは？　→　③「キリストの教会のわざに与る」『カトリック教会のカテキズム』1071,1072より

特集　では私たちはどうすればいいのですか

列福式に立ち会って

私たちは昨年一年をかけて「一八八殉教者列福」を私たちの信仰の糧とするために準備し、そしてその列福式に立ち会うことができました。

これは日本の教会の信徒である私たちにとって、この上もない喜びとなりました。

「一八八福者」が与えてくださったこの喜びを私たちは今、どのように生きていったらいいのでしょうか。

信仰を伝える

聖母被昇天修道会　Sr高松常子

「私たちはそのように育てられました。ご覧ください。これが私たちの教会、私たちの信仰です。いつか、そのようなことを本当にニコニコしながら伝える日が来れば」と昨年９月７日の香川地区「教区民の集い」の締めくくりとして、講師の古巣神父様が残されたことばは私に今も大きな課題となっている。

考えてみると、私が信仰を頂いたのも、召命の恵みをいただいたのも、あの殉教者たちの祈りと尊い犠牲の賜物に他ならない。との思いがあの列福式に参加した時にあらためて思い起こされ、感謝の思いでいっぱいであった。

「信仰を伝える」私は、そのことをどれほど真剣に考え、実行しているのだろうか？また、何を伝えているのだろうか？次の世代に何を残していくのか？迫害の嵐の最中に、ご聖体の神秘に生き、ゆるしの秘蹟を大事にした殉教者たち、そして、弱い人、病む人を助け、迫害するものを許し、祈った殉教者たち。２１世紀の今の日本に生きる教会の一員として「伝える」という使命が一人一人に与えられていると思う。

「信仰を伝える」ために、私は、神様の慈しみに満たされていたい。真理を深く心にとめ、神様のみ前に生きていたいと願う。勿論、信仰は神様の恵み、そして、信仰は自由な答えでもある。

弟子たちも「主よ、信仰を増してください」と願った。私も、この祈りを繰り返そう。自分に降りかかる出来事を信仰の心で、聖母マリア様のように思いめぐらしたい。そして、その理不尽なことが神様の慈しみであることを、発見していきたい。

子どもたちが、しっかりと自分の意見を持ち、自由な心で、善を選び取ることが出来るよう、私たちは子どもたちを援助していかねばと思う。私たちが先ず、神の前に素直に立つ姿を子どもたちに示していけたらと願っている。そして、神様が一人一人を愛していて下さっている優しいお父様であることを、発見していきたい。

交わりの教会を目指して

徳島教会　片山耕太郎

列福式に参加した人は、一様に「よかった！」と口にします。確かに私も行ってよかったと、帰ってからも舞い上がっていました。しかし、時が経つにつれて何がよかったのかと自分に問い詰めると、漠然として答えが出ませんでした。それは、何故かあまりにも今まで殉教者のことを知らなかったからです。ましてや結城了雪神父は私が勤めている会社の目と鼻の先で産まれ育っています。それから、殉教者についてもっと詳しく知りたい、その土地の歴史が知りたい衝動に駆られ、今、いろいろな本を読んでいます。幸運にも父親が本が好きで、読み切れない本がずらりとあります。故結城了悟神父の「日本とヴァチカン」もありました。本を読んでいて感じるのはやはり絆です。いのちをかけて愛を証したキリシタンです。私たちに何を問いかけているのか、重い課題です。現代の共同体として考えた時、私はもっと教会に分かち合いが必要と思います。大阪教区が出している「新生の明日を求めて」の中でも、分かち合いについて取り上げています。自然に人が集まる交わりの教会は、互いに共感し、心を一つにすることによって真の共同体になります。「その人は、前を通り過ぎるだけの人ですか。その人は挨拶を交わすだけの人ですか。その人は、立ち話をするだけの人ですか。その人はお茶を飲みながらじっくり話をする人ですか」。時間を忘れて色々な事について話したいです。一人一人の人生、信仰生活の話が聞きたいです。忙しさの中で心が失われている時代、分かち合いによって何かが生まれるような気がします。

今回の長崎の旅で、よかった事が見えてきました。それは、心が変われる場所に行ったということです。長崎は本当に特別な場所でした。又、必ず訪れたいと思います。

希望の光と勇気を見失わずに

宇和島教会　端山和子

列福式への参加を決めたのは、見る・聞く・歩く・そして感じることで私自身を見つめ直すことにしたい。殉教者のこともはっきり解っていない自分だけれど少しでも知りたい。そんな思いからでした。

松山までお話を聴きに行ったり、教会ではともに祈り資料を読んだりしたものです。１１月２２日、巡礼団二百余人の仲間に入れて頂き愈々松山からの出発でした。

１１月２３日は過酷な迫害にあいながら神への信頼のうちに生き、ひたすら神のみもとへ歩んでいった人々の殉教の地を訪れ、その地に立っていると歴史の中の一齣では済まされぬものの何かを感じたものです。恐ろしくてむごい話は４００年の前に引き戻され身体の震えるような思いを味わったことでした。

有明の海をのぞむ霊丘公園に立って見る海は、私の住む海の色と浜辺に打ち寄せる波の音と同じように穏やかなのに、パウロ内堀作右衛門の３人の子供達を呑みこんだ海であったことは忘れられない事でしょう。

翌日むかえた列福式は心配していた雨の中で始まりました。一時は激しい雨を肩に背に受け水溜りに置く足に目をやりながら思いました。神様は私達に４００年の昔、殉教への道をたどった人々に思いを馳せ祈る時をお与え下さったのだと。

式は不思議なほど平穏な気持で殉教者の人々を称え祝ううちに雨も上がり、お恵みを喜び合ったものでした。知らない人と共に祈り喜び、声を掛け合ったことの経験は大切なものとなっていくことでしょう。

その後私はどう変わったか、何を得たか、私だったらその時どうしたであろうか、答えは出ませんが遠くにあった殉教者の存在が近くに感じられてきた事、凄まじい迫害の中、神への凄まじい信頼を示して下さった人々や子供達がいた事は、私達に「希望の光と勇気を見失わないで」と言っている声が聞こえます。

私も、子供達・若者達に「命を大切に、いじめないで、元気で大きくなるのよ」と叫びながら、平和と自由を育む世界への願いを込めて祈りつづけたいと思います。

信仰　―親の姿勢が問われる今―

松山教会　竹田光則

１１月２２日、私たち家族は、高松教区の皆さんと一緒に、列福式に参加するため長崎へ向かいました。ハビエル・レチョン神父様が、「殉教者の精神を知り、一人一人が自分を振り返って、皆の心が一つになるように祈りながら行きましょう。」と言われて、その言葉を胸に巡礼が始まりました。

翌日は、日本２０５福者殉教者顕彰碑が建てられている大村市や、島原の乱の中心になった原城跡で、古巣神父様のお話を聞き、皆で聖歌を歌い、心を合わせて祈りました。また、霊丘公園に行きました。そこから見える海では、パウロ内堀作右衛門の三人の息子たちが、父親に見守られる中で殉教しました。「この大きなお恵みをくださった神に感謝しましょう。」と言い残して、５歳の子供までもが、喜んで神様に命を捧げた場所でした。私の息子の真生も、この幼い殉教者の話を教区民の集いの時に聞いていて知っていたらしく、ここでの出来事が心に残ったようです。

列福された１８８人の殉教者の中には、１歳から４歳までの子供が２９人含まれています。一家揃っての殉教も多く、子供たちは、親からしっかりとした信仰を受け継いでいました。こんなに素晴らしい信仰が、４００年も前の日本に息づいていたことに、とても感動しました。

古巣神父様は、「信仰は教えるものではなく、親の姿勢が問われている。」と言われましたが、私も子を持つ父親として、これからどうすれば良いのか、考えていきたいと思います。この度の巡礼に家族３人で参加でき、また、多くのお恵みを頂けた事を神様に感謝しています。

列福式に参加して
―殉教者の物の見方とは―

四日市サレジオ志願院　　高校２年　馬場　洸

去る２００８年の１１月２４日に行われた列福式を通して、神様は私達キリスト者にとって素晴らしいモデルを与えて下さった。ペトロ岐部と１８７殉教者である。神の教えの為に自らの血潮をもって証しした殉教者は、どれをとっても私達の良き模範なのだが、私は特に彼らに対し感銘を受けた点がある。それは非常にポジティブな姿勢で殉教というものと向き合っていたという点である。

例えば、今の時代も迫害があったとして、もし刀を持った役人が「棄教しなければ殺す。」と脅してきたらどうだろうか。間違いなく恐いと感じるに違いないと思う。それは一概には言えないが、私達が死というものをマイナスイメージで捉えているからだと思う。しかし殉教者はそうではなかった。殉教者は死を恐れず、むしろ喜んでポジティブに殉教を受け入れた。彼らの目にはきっと恐ろしい身体の死ではなく、その先にある輝かしい永遠の命が映っていたのだろう。列福式の説教の中で白柳枢機卿様が「恐れるな」という言葉を繰り返しおっしゃっていたのを鮮明に覚えているが、それを聞いた時、今の私達には殉教者達のようなポジティブ（ただし、ただのポジティブではなく神への信仰からくるポジティブ）な物の見方が必要なのではないかと感じた。列福された殉教者の一人、加賀山隼人は「人生の苦労は、歯を食いしばって耐えることだけが全てではない。喜んで耐えたいものだ。」と遺言に残している。信教の自由が認められたこの日本で私達が殉教する事は難しい。しかし、殉教者のような信仰をもって私達が日々の様々な苦労を喜びをもって耐える事が出来たら、それは今の時代における立派な「殉教」なのではないだろうか。そして、そうする事で私達は自分の生き様を通して回りに殉教者という模範を示すことが出来るのではないだろうか。

私は今回の列福式をオリンピックの聖火リレーに例えてみた。私達は殉教者の熱い信仰の炎が燃える聖火を手に列福式でスタートを切り、次の世代の教会を担う人々の元へ今、走り出したのである。だから私はその信仰と、そこからくる殉教者達のようなポジティブな物の見方を次の人々に伝える事が出来れば幸いだと思う。最後に祈りを込めて私の大好きな言葉であり、殉教者の残した素晴らしい祈りを思い起こしたいと思う。

「神様、私を清めて下さい。信仰の火が消えることのないように」―有馬の殉教者ディエゴ林田の姉・マグダレナの言葉より―

若い力

出会いから振り返って

松山教会　寺尾由香里

一昨年の１２月、シスターから誘いがあり、久しぶりに教会へ出かけることになりました。そこにはたくさんの出会いがありました。改めて神様との出会い、同じ道を進む仲間たち、そしていろいろな活動を通して出会った人々と、身の回りの話をしたり、仕事の話をしたり、とても充実した時を過ごしました。その話の中では、自分と同じような悩みを抱えていたりして、少し安心したり、もう少し大人にならないといけないなと思ったりしました。共に悩んだり考えたり、一人じゃないんだなと思うと、少し自信につながりました。

仕事でも、保育士として小さな命を預かっているので、この仕事の責任の重さを感じています。この職に関わらずどんな仕事でも、社会に出ると自分にかかる責任はとても重く、その重責に打ち勝つ強い心が必要だと、ひしひしと感じさせられました。でもなかなかそんな強い心も持てず、折れてしまいそうになりながらも、子どもたちのくもりのない笑顔や仲間たちに支えられ、頑張っています。そして教会へ出かけ、神様の前で自己反省し、安らぎを求め、また思いやりの気持ちを持って、人と関わることが出来るようパワーを頂いています。何にでも積極的に取り組みチャレンジして行くことで、新たな自分を見つけたり、また一つ新しい道が開かれたりすることに期待し、人との出会いを大切にしていきたいと思います。

また、いろんな活動で自分を振り返る中で、高校時代シスターに誘われるがままにいろいろなところへ行き、多くの経験をさせて頂きましたが、当時はあまり自分の中で実になってなかったように思いますが、今は一つ一つの出会いが大切で、共に生きることの大切さにも気づくことが出来ました。なにげなく過ごしてきた中に、大切なことを見逃していたように思うので、ゆっくりと振り返ってみたいと思います。

活発化の兆し―青年活動―

高知　田本晋吾

現在、高松教区の青年有志は２００９年６月２１日に開催する『あっちこっちミサ』という全国の青年を巻き込んだプロジェクトを準備しています。私が３年前にカトリックと出会った当時とは違う流れで青年活動が活発化してきていると感じています。この流れが生まれてきたのも青年の一人ひとりが高松教区内だけではなく、全国の教区や全世界の青年との出会いへ一歩踏み出し、頂いた大きな恵みやパワーを何かしらで証しできないかという想いが生まれたためだと思います。あっちこっちミサのテーマでもある「出会いは救い」。出会いによって隣人を愛する心や自分自身も大切な存在だと思い返すことができます。

しかしながら、盛り上がって来ている活動の中で問題がないわけではありません。神様の下、集い遣わされた私たちですが、育った環境も性格も違い、時には意見の食い違いで衝突することがあります。だからこそ、祈りや交わりを大切にすることで相手を尊重し受け入れ、お互い一つに向かって歩んでいけるのではないでしょうか。そしてこれからは自分達だけでなく、次の世代へとつながるバトンや幅広い視野を見据えていかなければならないと思います。

最後に、青年活動へ協力してくれる仲間や周りを支えてくれる方々への感謝を忘れずに、これからも歩んでいきたいです。

「パウロ年」の講座計画日程

1「パウロの捉えた福音と私たちの生」
日時＝二〇〇九年四月十八日（土）
十時～十二時三十分
講師＝朴 憲郁牧師（東京神学大学教授、上智大学神学部非常勤講師）

2「パウロの宣教―それは福音を生きる」
日時＝二〇〇九年五月三十日（土）
十時～十二時三十分
講師＝鈴木真一神父（パウロ会司祭）

3「異邦人への宣教」
日時＝二〇〇九年六月二十七日（土）
十時～十二時三十分
講師＝溝部 脩司教

場所はいずれも
カトリック四国会館二階

委員会報告

諸宗教委員会
ローマ・バチカン巡礼

「香川県宗教者平和懇話会」主催で二月七日から十四日までローマ・バチカン巡礼を行った。溝部脩司教を団長にカトリック、仏教から県外者を含めて総勢四十一名が参加した。巡礼の中では、まずバチカンの「諸宗教対話評議会」を訪問し、質疑応答をおこないながら対話を深め、アッシジでは聖フランシスコ教会において合同礼拝をおこない、平和の祈りを捧げた。さらに教皇謁見にあずかり、相互の交流も深めた。また、古代ローマ、バチカン美術館、サンピエトロ聖堂など参加者にとってローマの文化に触れることもでき、ローマの巡礼となった。これを機会に諸宗教対話の会を四国四県に拡げていきたい。

サンピエトロ聖堂の広場にて

「人権を考える」委員会
「カリタス高松」ご協力に感謝

「信者たちは皆ひとつになって、すべてのものを共有し、財産や持ち物を売り、おのおのの必要に応じて、皆がそれを分け合った。」使徒言行録２・44～45

最初の信者から、キリストの死と復活をとおして、神の永遠の命に与り、新しい生活を送るようになり、神の愛によって、互いに愛し合い、助け合うようになりました。

現在、世界中のカトリック教会に「国際カリタス」という組織があります、初代教会より受け継がれたこの精神を実現させています。

そして国際カリタスは、各国、各教区にも置かれています。日本では、四十年前にカリタスジャパンとして、活動に参加することになり、愛の実現のために働いています。

高松教区においても「人権を考える委員会」が二〇〇六年末に発足し、この委員会の中にカリタス高松として所属しています。まだ小さな歩みですが、少しずつ活動の輪を広げて行きたいと思っています。これまでの皆様の協力と祈りに感謝しています。

カリタスジャパンは、国外・国内において、社会福祉の活動を援助するために、年間を通じて献金や募金をお願いしています。その中で一番重要なのが「四旬節の愛の献金」です。

四旬節に神様は、回心の道を歩むように呼びかけておられます。自分の持ち物から兄弟を助けることは、回心の一つであり、愛の証しです。皆様の小教区で「愛の献金」に関する資料が届いていると思います。是非、みて、使ってください。カリタスジャパンによる「つなぐ二〇〇九」では、新しい試みとして、英語で説明されている部分もあります。この冊子を、個人でも、グループでも、黙想と祈りに役立ててください。

カリタスの活動、愛の献金について「カリタスジャパン・ニュース」、カリタスのホームページ http://www.caritas.jp をご覧ください。

「たがいに愛し合いなさい」と、イエス様が教えてくださいました。カリタスジャパン、また、今年の「愛の献金」をとおして、そうなることができますように。

生涯養成委員会
パウロ年に「宣教」考える

一月二十五日の聖パウロの回心の祝日に当たってパウロ年に因んでの最初の行事が行われた。聖パウロの回心の祝日のミサ後、大阪教区司祭和田幹男神父は「福音は神の力」というテーマで講演なさった。ミサのお説教と合わせて、パウロのイエスとの一瞬の出会いが、その後の宣教活動にどれほど推進力となったかを実感させられた講演だった。イエスが弟子に残した言葉「全世界に行って、すべての造られたものに福音を述べ伝えなさい」（マルコ16・15）は文字どおりに聖パウロの異邦人への宣教活動を支えた言葉だった。

「宣教」という目標にしている高松教区の一員として、聖パウロに倣い「すべての人に」福音を述べ伝えましょう。

桜町教会聖堂にて

福者ディオゴ結城了雪神父をたたえて顕彰碑建立

溝部司教　ミサを司式

徳島　カトリック阿南教会

昨年十一月に長崎市であったローマ教皇庁による列福式で、聖人に次ぐ「福者」に列せられた、徳島県阿南市ゆかりのディオゴ結城了雪神父（一五七四年～一六三六年）を顕彰する記念碑の建立を祝う式典が一月二十五日、地元のカトリック阿南教会（担当司祭・バートラム・Ｎ・シルバー神父）であった。カトリック高松司教区が主催、同県の関係者では日本二六聖人の一人、パウロ三木以来の三八〇年ぶり二人目の福者誕生を祝った。

高さ二メートル、幅一メートルある愛媛県産の青石に、「阿波出身　五畿内最後の宣教師福者ディオゴ結城了雪神父顕彰碑」と刻まれ、横に六十一歳で亡くなるまでの略歴碑が添えられている。式には、四国四県の教会代表と修道会関係者ら、岩浅嘉仁・阿南市長、郷土史家ら百余人が参列した。溝部脩司教が記念ミサを挙げ、「どんなに迫害されても一人で責めを負って殉教の道を選び、悪に敢然と立ち向かった強さと、苦しむ人々に対する優しさを現代の私たちにも」と話し、岩浅市長は「結城神父が阿南市と深い縁にあったことを誇りに思い、今後も遺徳を忍びたい」とあいさつした。

結城神父は、室町幕府を開いた足利家の流れを引き、阿波の平島庄（現在の阿南市那賀川町）に館を構えた、阿波公方一族の末裔として生まれた。徳川幕府によるキリシタン禁教令で追放されたマニラでイエズス会の宣教師になり、日本に潜入して一六三六年に殉教するまで二十年、畿内を中心に幅広く布教活動をした。

顕彰碑建立は、結城神父に「福者」の称号が与えられるのを記念し、一昨年九月に高松司教区が徳島市で開いたシンポジウム「足利将軍・阿波公方の末裔　殉教者ディオゴ結城了雪神父の生涯」を機に進められていた

「福者」に列せられたディオゴ結城了雪神父の顕彰記念碑の除幕式を司式する溝部脩司教と参列した各教会関係者ら＝徳島県阿南市富岡町の阿南教会で

問い合わせ先＝０８８４・２２・０４１１、ファクス・２２・３２８１

ＬＯＯＫ　ＯＵＴ

長崎　西坂の丘２０００人
祈りの中で２６聖人記念ミサ

日本２６聖人殉教記念ミサが、２月１日（日）午後２時から長崎市の日本２６聖人殉教地（西坂公園）で行われ、髙見三明大司教主司式のもと約５０人の司祭団と信徒ら約２０００人が集まり祈った。説教師のデ・ルカ・レンゾ神父（日本２６聖人記念館館長・イエズス会）は、「殉教者たちは他人のことを考えて殉教していった人々だった。いくら困った状況であっても他人を忘れてはならない」と話し、自分の使命は何なのか考え行動した殉教者たちの心の寛大さ、神さまについていく心の力についてふれ、昨年の列福式を通して再確認することができた殉教者たちの精神に倣うよう導かれたミサとなった。

ひと

うどんも日用の糧
三本松教会　六車廣行さん

三本松といえばルルド祭とお接待うどん。あがないの特別聖年の長崎・五島巡礼で心動かされ初代ルルドの手直しから始まったルルド祭。毎年聖母月に教区民が自由に集い、祈り、うどんを中心にテーブルを囲む。地元のうどん研究会とも研鑽を重ねたうどんはなかなか好評である。京都、熊本から老司教さま達の舌鼓も届く。松永神父様時代の芳賀の里巡礼に始まり、「主はどこに」と鍋・釜を積んで今山に入り資材を集めベトレヘムに思いを馳せる。昨年は列福式の帰路ひたすら走った高速道路と瀬戸大橋を登場させた。そして、夜半ミサの後のもちよりパーティの締めはやっぱりうどんだった。

何事も前向きにまず受け入れる。自ら向き合い、判断する。わからない時は尋ねる。賢者は身近にいる。今年は春に訪れる三人目の孫の誕生も心待ちにしている。

木田久子（郡中教会）

この秋、創設五十周年を迎える。記念誌の準備に入り、正しい情報を！と腐心している。

もうひとつ、毎年幼子イエスを迎える道に心を配る。野もグループで出掛け、交流の場を分かち合うこともある。

地区便り

鳴門カトリック教会　しおりが完成

鳴門カトリック教会は今年五十周年を迎えます。十一月三日に行う記念式典に向けて委員会でその準備を進めています。その会で、教会の「しおり」を作成する案が出されました。

御聖堂には故ブラザー津田季穂氏（オブレート会士）の肉筆である「十字架の道行き」が飾られています。その御絵を折りたたみ式にし、ポケットやバックにいれ、いつでも取り出してお祈りができるようにという案がだされ、昨年の暮れに出来上がりました。

皆様、鳴門教会への訪問の機会がありましたらどうぞこの「しおり」をお持ち下さい。

小豆島にも『きりしたん燈籠』

小豆島教会　髙橋佐和子

小豆島の中山という地区に「きりしたん燈籠」があるのだと聞き、気になって仕方ありませんでした。一八八殉教者の列福式の感動も冷めやらぬ十二月の初めの日曜日、中山地区がある旧池田町に住む小豆島教会の信徒がその場所を確認したという話を聞き、私たちもその場所に行きたい、「きりしたん燈籠」なるものを見たいと、数人の信者たちは濱口秀昭神父様を誘い出かけて行きました。そこは今でこそ車が通れる立派な道が通っていましたが、かつては奥深い山の中で人が住むにはかなり困難であったのではと思わせるような所でした。狭い小さな墓地が道路わきにあり、「燈籠」はその少し後方の隅にありました。その傍には近年になって建てられたのであろうと思われる「きりしたん燈籠」と書き込まれた石の碑が建てられていました。奥は谷のようでダムの水があり、そこに小さな集落が水没しているとのことでした。

チースリク神父様の著書『高山右近史話』の中には小豆島が小西行長の支配下になった時、行長はマンショ三箇を小豆島の代官として置いたと記されています。そして別の資料には熱心なキリシタンがいた三箇周辺には、いくつかの「キリシタン燈籠」が今も残されていると記されています。中山に「きりしたん燈籠」が残されているということは、かつてこの辺りにキリシタンの会所があり、熱心に信仰生活を送っていた人たちが居たということではないでしょうか。一五八七年の秀吉の禁教令により宣教師らに二十日以内の日本退去令が出されたことから、行長はキリシタン大名である高山右近と宣教師オルガンチノを一時小豆島にかくまったそうで、もしかして！「ユスト高山右近」はこの辺りにかくまれていたのではないかと想像は膨らみ、私の胸はときめきました。

合同クリスマスミサの中で聖劇

高知地区合同教会学校　宮本匡士

七月十三日の中島町、江の口合同評議会で、教会学校の子供たちが「今年のクリスマスは教会学校の子供たちが聖劇を発表したいです。楽しみにして！」と、提案した時から難題はスタートした。夏休みに子供と題材を考える。合同練習の時間もあまりないので、せりふを覚えることや配役決めが大変だ。以前、アニメビデオ「おめでとうイエス様」を観たことがある。ビデオに沿って、それぞれが練習できる。日曜毎にビデオを観る。

十月の合同評議会で「十二月二十一日（日）中島町教会での合同ミサの中、福音朗読（お告げ）の後に聖劇を行うこと」が決定された。各々練習できるように、マリアとヨゼフは二組（前半・江の口、後半・中島町）を抜擢した。当日の子供たちの出欠状況がつかめない中、シスターたちが衣装を作った。背景も聖堂いっぱいの大きさの宿屋、馬小屋、宮殿の三つを制作した。十二月七日（日）合同教会学校の日、中島町教会でリハーサルを行う。全員集合出来なかったし、一度きりだが子供同士の結束は出来た。当日、家族や青年部の協力を得て、本番に強い現代っ子の特長で、練習ができなかった動作をのびのびと演じている。「久しぶりに聖劇を見た」「天使たちが可愛い」「みな上手」「音響もよく子供の動作もぴったり」・・・。聖堂満員の参列者の声。フィナーレに全員で記念撮影。ミサは滞りなく進行した。教会学校にとって印象深い一日となった。

投稿記事募集

【テーマ】
テーマは、特に定めません。

【投稿要領】
字数は３００字以内（写真歓迎）
「所属教会名、住所、氏名」明記のこと。
中傷・誹謗はご遠慮下さい。
原稿はできるだけメールで送って下さい。
写真もデジカメで撮影したものはメールで送って下さい。

【投稿先】
メール：catholic-takamatsu@takamatsu.catholic.ne.jp
郵　便：〒760-0074
高松市桜町１丁目８－９
カトリック高松司教区広報担当
ＴＥＬ：087-831-6659
ＦＡＸ：087-833-1484

医療のともしび（13）

旅立ちの日を自分らしく

★　昨年暮れに看取ったふたりの高齢者のこと。ひとりは１０４歳のＯさん。彼女は８０才の娘さん夫婦の手で、在宅介護。ミキサー食を注射筒で注入して貰い当院からの訪問看護、診察をうけていたが、遂に在宅のまま、孫さんに「シッちゃん、シッちゃん」と呼びかけられつつ、眠るように旅立たれた。デイサービスに来ては車椅子で病院中を散歩していた姿が思い浮かぶ。

★　もと公立病院の検査技師だったＨさん。結婚したが子供がなく、退職後脳梗塞で寝たきりの奥さんを施設で介護していたが、遂に御自分も老衰と認知症となり、今回心不全で入院。甥御さんから提出されたのが、日本尊厳死協会の発行した延命無用の宣言書。主治医は意志を汲み、自然に見守ることになった。プロテスタントの受洗者で最近カトリックの勉強中。坂出のカトリック教会に納骨堂もちゃんと準備。認知症でありながらも、「キリストはいつもそばにおられる。」と臨終の床ではっきり宣言され、魂は決して呆けていないことを、我々に教えてくれた方だった。

★　今も当院では、２０人くらいの方々が、殆ど眠りながら、経管栄養や、喀痰吸引など受けつつ生きておられることを思う。読者は尊厳死と延命治療を受けて長く生きるのとどちらを選択されますか、一度よく考え意志を家族に伝えておかれるよう、お勧めします。

坂出教会　聖マルチン病院　曽我部輝子

心のこもった（愛）贈り物

カトリック教会ではしばしば世界児童福祉献金、四旬節献金、クリスマス献金等の愛の献金を行っています。この中では大人だけではなく、純真な子どもたちも、「今年もたくさんのお年玉をもらい、おいしいお料理もたくさん食べ毎日暖かくして安心して過ごしました。その中から僅かですが献金させて下さい。少しでも多くの人が救われることを願います。」と言ってその心を精一杯届けています。

みんなが　しあわせになりますように。

たべもののないおともだちやびょうきで苦しんでいるおともだちがみんなしあわせにすごせるようにわたしのおやつをがまんします。

おもちゃをがまんします。

ほんやノートやエンピツがなくてべんきょうできないこまっているくにのこどもたちにつかってもらいたいです。

せんそうでおとうさんおかあさんがいないこに。

たべものがないおともだちがたべられますように。

ネックレスをがまんしました。

たんじょうびプレゼントをがまんしてけんきんします。

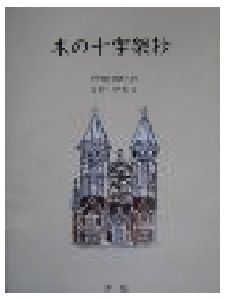
こうして集められた献金はカリタスジャパンやバチカンを通して確実に、本当に助けを必要としている人たちに届けられています。

新刊書籍・DVD紹介

■「あの笑顔が甦った」

シエラレオネ支援で起きた愛の奇跡
佐藤正明・根岸美智子著
　西アフリカの小国シエラレオネの子供たちの教育に取り組む日本人シスターと支援するサポーターたちの心温まる物語。
聖母の騎士社刊　聖母文庫
（本体1000円＋税）

■「木の十字架抄」



　カトリック信者（松山）であり盲目の歌人アララギ派の重鎮矢野伊和夫さんの信仰を歌う感動の２５３首を解説を添えて収録。
定価1000円（消費税送料込）
ご希望の方は下記①～④を明記してＦＡＸして下さい。
①注文者名・電話番号　②注文数　③送付先住所・氏名・電話番号　④送金者名・又は口座名義（①と異なる場合は必ず明記）
注文先：〒790-0012
松山市湊町4-13-3ブロンクス内
矢野武虎
089-935-6600　FAX 089-935-6500
振込先：聖ヨゼフの会斧社
郵貯銀行 記号 16170 番号 11761251
振込確認後郵送

■ＤＶＤ「ローマ帝国に挑んだ男―パウロ―」

カトリック中央協議会広報推薦
　パウロは初めはキリストを信じている人々を迫害していたが、不思議な出来事を通して、今度は迫害を受ける側になる。
　一体何が彼を変え、そして命を懸けるほどにイエス・キリストを信じさせたのか・・・。
全国のキリスト教書店、カトリック書店で販売中
特別価各4580円（税込）
７月１日より定価5040円（税込）

■「ベルナデッタとロザリオ」

　ロザリオの祈りだけを知るルルドの貧しい少女ベルナデッタに、聖母マリアは、罪びとである私たちを極みまで愛された御子イエスの愛と、御父の慈しみを教えられた。
　ルルドのご出現１５０周年を記念して新装復刊。ベルナデッタの祈りと単純素朴な生き方に迫る名著。
アンドレ・ラヴィエ著、ヌヴェール愛徳修道会訳　四六版並製　206ページ
定価1050円（税込）　ドン・ボスコ社刊

――カトリック新聞購読のお願い――

　カトリック新聞は、全国の教会情報やバチカンなど世界の教会の動きを伝える外電、福音解説、読者からの声などを通して、現代社会とカトリック教会の今を幅広くお伝えしています。
　購読申し込みのはがきは、日本全国の教会にお配りしております。購読のお申し込みは、電話（03-5632-4432）・ＦＡＸ（03-5632-7030）で、またＥメール（kodoku@cwjpn.com）、ホームページ（www.cwjpn.com/cwjpn/）でも受け付けています。

カトリック新聞社

主な司教日程

3月3日（火）司祭評議会
　7日（土）～８日（日）拡大宣教司牧評議会
　9日（月）～12日（木）上五島（下田神父実家）
　14日（土）カタリナ大学卒業式
　15日（日）～17日（火）諫早教会黙想会
　20日（金）東北カトリック校長会
　21日（土）結婚式（教え子）
　22日（日）調布教会講演
　27日（金）～28日（土）行橋教会黙想会
4月1日（水）日本神学院開校式
　5日（日）～11日（土）聖週間
　12日（日）復活祭
　25日（土）結婚式（教え子）
　26日（日）子供の集い
　27日（月）神学院授業
　29日（水）～30日（木）カトリック学校委員会総会

教区スケジュール

3月3日（火）司祭評議会
　7日（土）～８日（日）
　　拡大宣教司牧評議会（高知）
　18日（水）朝祷会
　19日（木）聖ヨゼフ祝日
　25日（水）神のお告げ
4月5日（日）受難の主日（枝の主日）
　8日（水）聖香油ミサ
　9日（木）聖木曜日
　10日（金）聖金曜日（大斎・小斎）「聖地献金」
　11日（土）聖土曜日（復活徹夜祭）
　12日（日）復活祭
　15日（水）朝祷会（桜町）
　18日（土）講演「パウロの捉えた福音と私たちの生」
　19日（日）復活第２主日（神のいつくしみの主日）
　25日（土）～26日（日）子供の集い

編集後記

少々春めいてまいりました。
一二七号はいかがお読みになりましたか。
これからも、もっと読み易い広報紙を目指し、カラーで提供出来るよう工夫を凝らして参ります。その為に皆様のご協力とご支援を期待しています。
ＳＮ

お願い
　高松教区広報委員会では、この度広報紙カラー化財源として広告欄を新設し、皆様にご協力をお願いすることに致しました。紙面をカラー化することによって、もっと読みやすく、更に皆様が自ら手にとって読みたいと思われるような紙面づくりを目指して参ります。仔細につきましては当委員会にお尋ねください。なお、下欄は広告の実寸大モデルです。このモデルをご参考ください。多くの個人、団体からのお申込みを心からお待ちしています。

カトリック
高松教区広報委員会

ただいま広告募集中！！